

# PHD LETTER

## 〈30〉

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1989・3

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会

編集人：草地賢一

住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
TEL.(078)351-4892 FAX.(078)351-4867

郵便振替：神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会

定価：100円

レイアウト：エフアンドエフ

- 研修生東・西スタディツアーレポート…………… 2～3P
- タイスタディツアーレポート…………… 4～5P



タイ北部山間地方にて 撮影/矢田豊子

タイの山奥で見た大きなのこぎり

二人の息がぴったり合って、ズーコ、ズーコ、筋肉が動く、汗が光る

単調な音が板を生む

労働のリズムが山にとけこむ

思い切って声をかけた「ちょっと一服しませんか？」

矢田豊子



# 東西日本 STUDY TOUR

PHD研修生は、日本での研修期間中、各々の個別研修の他に、研修旅行に出かけます。研修旅行の目的を、今年度は、

1. 様々な集会を通して、日本での学び自分たちの地域の様子を日本語で語り、自国での普及活動、グループ作り、リーダーのあり方などを実践として学ぶ訓練を行なう。
2. 広島、長崎での平和学習の他、様々な社会問題に触れ、その問題と取り組んでいる人々の考え方、活動から学ぶ。
3. PHD運動を支えて下さっている方々とお会いし、御礼と報告を行ない、あわせてPHD運動の輪を広げる。

の3つに置き、東日本研修旅行(11月中旬～12月上旬)を、西日本研修旅行(1月中旬～2月上旬)を、秋から冬にかけて実施しました。各地では、集会、見学、交流など暖かい受け入れをして頂き、誠にありがとうございました。

### 再会と新しい出会いと 88年度東西研修旅行報告

国内の各地を訪問し、研修生と多くのPHD会員、協力者との出会いを願って東西日本研修旅行を実施するようになって四年が過ぎました。この旅行の目的は次のようなものです。第一は研修生のリーダーシップ開発です。

日本、韓国そしてフィリピンで農業技術、漁業技術、あるいは共同組合などの研修をしたあと各々の出身の村に帰って彼等は村の将来のリーダーになることか期待されています。それに応えるためには人々を起し、組織し村づくりを進めていくリーダーシップを発揮しなければなりません。この旅行でさまざまな人々、グループに出会いこれらの人々とのスムーズなコミュニケーションをつくり、またこれらの人々に自分の考えを伝えることを学びます。

第二の目的は工業化、近代化を進める陰で弱い人々が捨てられたり、環境が破壊された地域を訪れそこにある問題を学ぶこと、及び長崎、広島の被爆者と出会い平和学習をすることです。これらの学習を通じて、彼等が見聞し、修得した技術を自分の村で活かすための使い方の規範を考えることを願っています。

第三の目的はPHD運動を支える人々に出会ってご支援を感謝し研修生の口からその報告をする。併せて日本や日本人の在り方を見つめさらにアジアや南太平洋の草の根の人々との交流を深める機会にする、ということです。

以上の目的に添って東日本研修旅行は11月16日から12月8日までAコース、Bコースと二つ実施しました。旅程は次のとおりでした。

**Aコース**  
滋賀(大津・彦根)、愛知(名古屋)、神奈川(藤沢・鎌倉・逗子)、千葉(千葉・柏・松戸)、東京(千代田・新宿)、埼玉(毛呂山)、神奈川(川崎)、山梨(甲府)、岐阜(坂祝)、三重(四日市・鈴鹿)

**Bコース**  
京都(京都)、愛知(名古屋・豊田)、静岡(富士)、東京(新宿)、千葉(八千代)長野(飯田)、岐阜(高山)、富山(富山・大山・砺波)、福井(福井、芦原、三国)、和歌山(和歌山)

この旅行は主にリーダーシップトレーニングと報告、交流が中心に行なわれました。次に1月23日から2月12日までは次の

の旅で西日本研修旅行が実施されました。福岡(北九州・筑豊・博多)、熊本(熊本・水俣)、長崎(長崎・諫早・波佐見)、福岡(春日)、広島(広島・三次・口和・庄原・上下・甲奴・福山)、岡山(岡山・備前)西日本は筑豊、水俣、長崎、広島で多くの問題に出会い、また真剣に学習がなされました。

以上かいつまんで旅行の目的、日程、旅程を報告しました。

次にこれらの旅行に同行し、研修生がどのよう日本を見た感じたかをまとめてみました。

逗子で池子の森を守ろうと立ち上がっている主婦に出会いました。ここで教えられた事は女性を中心になって自然を守り、また



各地でいろいろなことを学ぶ研修生

そのために地方自治を大切にしようという運動があることでした。タイのワラヤさんは「自分の国ではなかなか選挙を通じて民主主義を確立するにはまだ時間がかかるけれど、大いに励まされた。」と言っていました。

東京YMCAの専門学校では、アジアの留学生と日本の学生の対話が促進されるきっかけが与えられました。クラスの中で活発な話し合いが、研修生のクラス訪問によ



工業化の影で何がこったのか水俣にて



資料館で筑豊の抱える問題を学ぶ

て実現しました。富山では農民と研修生の交流が深められました。筑豊では犬養光博牧師の説明で、日本の工業化の陰で石炭よりも人間の命が奪い取られたこと、また今でもこの地で生活保護をめぐる問題が継続していることを学びました。スリランカのアジャンタ君は自分の国でも宝石の採掘現場や、紅茶のプランテーションで同じ問題があることを語ってくれました。

水俣では三人の印象深い人に出会いました。第一は塚塚巖さん。トップで40年働きのから、水俣病に苦しむ人々をハミリカメラで撮り続け、またご自分の軌跡を「おるか水俣」という本にまとめられた人。第二は浜元二徳さん。第一次水俣訴訟の原告として闘い、現在はアジアと水俣を結ぶ会を組織し、水俣病で不自由な身体を車椅子に乗せて世界に出かけ、公害の再発防止を訴えられています。第三は田ノ上さん。浜元さんと共に訴訟団の団長として激しい闘いの後、勝訴。その後奥様と二人で農地に戻り、1年かけて有毒複合農薬を完成させた人。ご自分の水俣病の治療を農的労働を通して実践なさった田ノ上さんの顔は、宗教的さりの境地に居る人のそれでした。

この他にトップの門前に座り込みを続けて149日目のテントに水俣病の認定を求める人々を訪問しました。水俣の訪問は五人の研修生の心を激しくゆさぶったようです。

インドネシアのアフナル君は、その後の訪問地でその経験を克明に語り続けました。

またこの西日本旅行では一つ新しい試みがなされました。PHDのボランティアが水俣と長崎に一週間同行してくれました。一つには日本の若者が環境問題、平和問題を現地で学ぶ、二つにはその学びをアジアの青年と共にする。この事を通して出会いが深まっていくという望ましい経験が与えられました。この試みは次回にはもっと拡大したいと思いました。

毎年この東西日本研修旅行を通して与え

れることは再会と新しい出会いの喜びです。この喜びがPHD運動を継続し拡大していく原動力となっています。

研修生自身も日本のさまざまな地で自分達を支えて下さる人が、いかに多くおられるかを実感するようです。旅を終えて帰ってきたら九州の久留米の人々から来年は訪問するようにとお誘いを受けました。来年はもっと工夫して更に多くの人々との再会と、新しい出会いを得たいと願っています。ありがとうございました。

## アジアを知る交流会での感想

高山市立新宮小学校

もっと知りたい 6年2組/谷みずき

アジャンタさんとファイジンさんがこられました。スライドをみせてもらったり、インドネシア語や、スリランカのシンハラ語をおしえてもらったりして面白かったです。スライドをみて、パイナップルやバナナなど、スリランカやインドネシアは、たくさんとれるからいいなと思いました。日本人はアジアの国の事を知らないけれど、アジアの人は日本のことをよく知っているのはなぜだろうと思いました。日本人はもっとアジアの国のことをしてくれるといいです。

楽しかった交流会 寺島宏美

土曜日、交流会がありました。スライドではびっくりしたことや、勉強になったことがたくさんあってよく分かりました。私は、終わるときまで、こんなに楽しくなるなんて思いませんでした。それがみんなが仲良

くなろうという気持ちがあったからだと思っています。



世界中の人々の心がひとつに...

暖かな握手 北村正美

交流会を終えてスリランカのアジャンタ・プレマラルさんにあく手してもらいました。とてもうれしかったです。手がとても黒くて、大きかったです。わたしは、あく手するとさ、ふとおもいました。いつになったら世界中が戦争をなくして、仲よくして世界中の人々の心がひとつになれるときがくるのだろうか。そんな日が1日も早く来てほしいです。

## 旅の途中で

加藤さんのお宅では、アジャンタさんを泊めていただきました。以下は樋口主事補と加藤さんとの一問一答です。

**樋口** 加藤さんは、これまでも外国の方のホームステイを引き受けられてこれだけか。

**加藤** ええ、アメリカやアジア、4ヶ国から6人ほどですが、アジャンタさんのような人は初めてです。

**樋口** と、言いますと。  
**加藤** とても心が行き届いた方で、ほんとうに気を使いきるくらい使って下さってねえ。日本人以上に、ある意味で日

本的でした。

**樋口** お話は、たくさんされましたか？  
**加藤** ええ、びっくりしたのは、あんまり日本語が上手なので「どうして、そんなに上達されたのですか?」とお聞きしたんです。そうしたら、わからない言葉にぶつかるとその言葉を頭の中で覚えておかれて、日本人同士が会話をしている時に、じーっと聞いているんですって。そして「あつ、こんな風に使うのか。」「この言葉は、こういう意味なのか。」と、そうやって覚えていくんですって。ほんとうに勉強熱心な方ですね。「もっと勉強したい。」って、言われてたのが、本当に印

象的でした。  
と、感激一杯、胸はずませて、話して下さった加藤さん。明るくて、かわいらしい(と申し上げたら失礼かな)行動力にあふれた奥様です。このように、研修生たちはツアー中に各地でホームステイをさせていただきます。一晩限りの「おとうさん」「おかあさん」にも強い印象を残しているようです。

(だが、初めてのお宅でアンマ上手の「おとうさん」に30分もマッサージをしてもらった豪の者の研修生を樋口は知っています。)

## 帰国してもがんばります!

afnal  
アフナル  
Jerimakasih kanyak  
afnal



村に帰ったら、村の人々に日本で学んだことを教えながら実行していきたいです。ただ日本で学んだことでも、村の生活に良くないことはやらないつもりです。村人とグループを作り、資金をだしあって栽培業をすすめていきたいです。日本でお世話になった人々にありがとうございました。

အိမ်ခြံမြေ နေရာက ဝတ်စုံပစ္စည်း  
アジャンタ プレマラル  
မေတ္တာစေတီ နေရာက



私の村では、町から商人が作物を買いにきます。今までは商人の力が強く、どうしても安く買い叩かれてしまっていました。村に帰ったら農業共同組合を作って、生産から流通まで自分たちでして、村の自立の資金にしたいです。また日本で学んだ牛豚などの畜産技術、養鶏などを村の人々に教え、複合的な農業経営を進めたいです。日本の皆さんどうもありがとうございました。

အိမ်ခြံမြေ နေရာက ဝတ်စုံပစ္စည်း  
ワラヤ 二徳さん  
ဘေသာရတီ နေရာက



私が住んでいるタイの東北部(イサーン)は、非常に土地がやせているので、日本で学んだ堆肥を普及させたい。また栽培法もタイに向くものと向かないものがあり、考えて村の人々に教えていくつもりです。村でグループを作って、自分たちが作ったものを自分たちで売っていく予定です。日本の皆さんありがとうございました。



タイ北部山岳地帯のカレンの村に帰国した研修生を訪ねる旅も3回目となりました。3期生ブリチャーさん、4期生ウィラットさん、ベリアさん、5期生コマさんそして村の人々との出会いに胸を高鳴らせ14人のメンバーは12月25日大阪空港を飛び立ちました。4人の研修生の推薦団体であるカレン・バプテスト会議(KBC)でのオリエンテーション後、村へ入り、4泊5日の滞在で研修生、村人との交わりを行い、1月1日夜、元気に帰国しました。

橋本 浩清 (大阪市・学校職員)

何もない、自由がいっぱい

私は今回訪問した村は、豊かであると感じた。確かに何も無いところだけれども、モノがないことによる自由がいっぱいある。例えばガス、電気を使わない自由、必要以上の家具や食べ物のない自由である。これらを経験することは、物質文化を持つ者の偏見だと思ふ。だったら、おまえはどんな暮らしをしているのかと問われれば、テレビはもちろん、冷蔵庫、洗濯機、ステレオ……とんでもない。そんな環境に育ってきたし、その文化に身を置いている。だとしたら、彼らには彼らの文化があり、その文化に身を置いていることで、彼らは豊かだ。明日食べる米に困っているとは思えなかったし、極端な貧富の差があると思えなかった。

橋本 浩清 (大阪市・学校職員)

日本でカレンの良さを認識 ～ベリアさんの現況

彼女はチェンマイに住んでいます。昨年5月に結婚したのですが、仕事の都合で普段は別々の生活です。彼女は平日はKBCで日曜学校で使う子供の本の制作の担当で、仕事が終わると看護婦になるために学校に通っています。そして週末には時間とお金のやりくりをして、山の村を訪ねます。村へ入ると土・日・月とかかることもあり、すると次の土曜は変わりに事務所へ出ないといけない。彼女の職場のボスはシビアなのです。村では先生のほうより、よく物事を知っているお姉さんという立場で、子供や婦人の人たちに接しています。一度にたくさんのお話を聞いてもらうのは難しいので少しずつ話すそうです。日本で学んで良かったことを尋ねると化学調味料の害を知ったこと、水保病について学んだこと、カレンの良さがわかったことだと話してくれました。

はじめはタイも日本のようになれればと思っていたのですが、日本を知るにつれ、カレンの良さを大切にしながら保健衛生や農業の発展を考えるようになったそうです。最近村に伝わる民族衣裳の販売などにも関心をもっています。彼女の笑顔で私たちが元気づけられました。

西村 園子 (西宮市・関西学院大学4年・ベリアさん滞在家庭)

便利さの裏にあるものを伝える義務

健康を守る要件として栄養、運動、休養がありますが、村の生活では栄養面で最も問題を感じました。タンパク質、カルシウムの不足を特に感じました。家畜が貴重で淡水魚なども少ないようでしたが、「トノウ」というゆでた大豆をバナナの葉にくるんでいぶした納豆のようなものがあり、こういうものは体に良いと村の人に話しました。昨年のメンバーの人たちから化学調味料の過剰消費は聞かされてあり、私も沢山は使わないよう伝えましたが、同じようなことをシャンプーを含めた合成洗剤の普及ぶりに感じました。川や池そして井戸の汚染の心配、水がふんだんに使えないこともあってか不十分なゆすぎによる根拠への残留。「この指は洗剤の為ですか」と差し出されたベリアさんの荒れてヒビ割れた指に心痛みました。化学調味料、洗剤、さらに農業これらの弊害についてはすべて日本で経験済みのはずです。日本の役割とPHDの研修活動の意義を強く感じました。

浜村 愛子 (島根県宍道町・保健婦・6期生研修指導者)

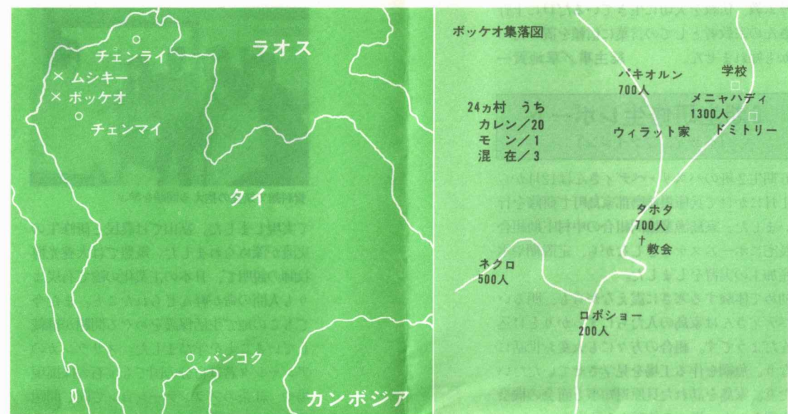
村の子供から学んだこと

村の子供たちに日本の折り紙や絵を教えた。初めてにもかかわらず、ほとんどの子供が回向するうちにできるようになった。田頃から家事を手伝ったり、機会ではなく自分の手で物を作ったりするためだろう。どの子供も日本の子供より手先が器用だった。でも中に一人、なかなか出来ない子がいて、教えてくれと身振りというので何回もくり返し教えた。とうとう何通りもできるようになった頃、また別の子供たちがやっていた。するとその覚えるのに時間のかかった子が、遅く来た子たちに教えた。何回もくり返してやる根拠強さや知識欲、子供同士の中での分かちあひなど、そんな光景を何度も目にした。日頃、私が担任のクラスで力を入れてもなかなか身達しにくいことが、もっと言えばそんなことをしてもらってはウチの子が遅れると保護者に言われることが、この村ではごく当たり前に行われていた。



村の子供たちにアヤ取りを教える参加者

矢田 豊子 (堺市・教員)

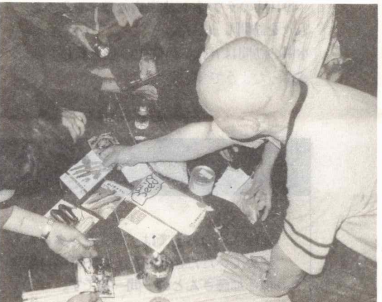


第3回タイフォローアップ&スタディツアー報告

長期的に村を訪れ交流を

ムンキー村のブリチャー君の家で、村の若い人達が開け扉裏を開いて夜遅くまで話した。昨年に続いて2回目だが、今回特に感じたのは、彼らの村にも貨幣経済がそこまで迫って来ていることである。研修生が、日本で学んだことをそのまま実施することは、環境が異なるため、難しい。村の実状を一番良く知っているのは彼らなので、研修生に対して助言は出来ても強制することは出来ないと思う。私達ホストファミリーの者は、焦らず、慌てず、長期的に村を訪れ、研修生や村の人々との交流を深めていくことが、カレンの新しい村づくりの助けになると感じている。

田中 五郎 (兵庫県波賀町・農業・4,5,6期生研修指導者)



日本から持参した種子の説明をする田中さん(右端)

「一緒に野菜を作らないか？」

この旅で、カレンの村の人々と一緒に生活をして、私にとってどんな影響を受けたかを説明するのは難しい。ただ、これから先色々な経験をする中、この村での本当の良さがわかってくるだろうと思う。村で印象深い質問をされた。「日本にもぼく達のような貧しい人たちはいるか?」で、答えるのに困った。私にとりて彼らに貧しいとは思わなかった。時間に追われ、物質欲を持たざるを得ない日本人の方が、むしろ精神的な面で貧しいと思う。「日本は確かに物は多いけれど忙し

ぎて過労で死んでしまった人もいる」という、「尻が潰してきた」と言った青年がいた。そしてその後「じゃぼく達と野菜をつくらないか、そんなに日本が忙しなら、この方がいいよ」と、冗談のようだったが、私は嬉しかった。

岡本 恭子 (神戸市・歯科助手)

人と人の関わり合いが大切

コミュニケーションと純粋な関心こそが、地球的な視野で、眺めた時に、社会をとらえる時の鍵となると私は思う。特に教育にし、農業にし、また他分野での活動にし。互いにその分野で役立つ手段以上に、同じ地球という環境に生きる仲間をつくる道具になるでしょう。村のユツタリとした生活を楽しみ、その結果、人と人の関わりあひこそが、暮しの中で最も大切なことだと感じました。私の現在の最大の望みは、あの旅行の参加者は、現在、忙しくて、まきりきった日常生活に帰っていますが、この旅行の体験を心にどめておいて欲しい。ただちょっと変わった体験のお土産話にして欲しいという事です。そうすれば、このようなスタディツアーが、私たちの価値観に良い意味での影響を与えたいと思われたい。(原文英文 翻訳編集部)

上, ジョアン (神戸市・カナディアンアカデミー寮長)

村人から、私たちが、そしてその中身

タイの町中で布施を受けた坊さんが突っ立ったままて捧げた方の人頭を下している光景を見かけましたが、村での滞在中、私はその意味をぼんやり考えていました。「三輪着浄の布施」といって布施が成立するためには三つの輪が滑らかになければならぬといふ。与える側、受取る側、与えるもの。布施と同じ意味の言葉に喜捨という言葉があります。喜んで捨てさせていただく、そのことに感謝する。PHDの標語の「LIVING IS SHARING」を私はそのような解釈をしています。分けあったほうがうれしい、おいしい、ありがたい。分かち合うことなしに「生」を感じることができない。そんなことをこの旅で感じました。

井上 肇 (米子市・鳥取医大生)

自然が多いタイ

ぼくはタイツアーに参加して、とても楽しかったです。タイはとても暑かったですが、夜になるととても寒かったです。店に行くとき日本にあるようなお菓子が一杯あったので、少し買って食べてみると、どのお菓子もちょうどだけピリツツしていました。日本も良い所だけれども、タイの方が自然が多くて、ノビノビとした気持ちになりました。村では水牛に乗ったり、村の子供たちに日本のアヤ取りを教えたりしました。

黒田 善二 (加古川市・志方中学校2年)

山の村への砂糖の普及とそれに伴う虫歯予防の必要性

ムンキーのアナマイ(診療所)に立寄った時、3才の女の子が前歯の腐蝕が原因と思われる急性炎症をおこし、来ていた。アナマイの職員は手におえない様子を見て、私にできることがあればと口の中を診た。放置すれば骨髄炎にも移行しかねない状態。そうすると生命の危険もでてくる。しかしアナマイに歯科用の器具はなく、私自身も検診用器具を持参しているだけ。暫くそれで治療を試みたが、埒があかない。かえってその子を痛い目にあわせるだけのようなので、処置をあらかじめアナマイにあった抗生物質を与え、帰宅させた。症状の改善を祈るような気持ちでそこを離れたのだが、歯科の治療は機械や器具がないと全くお手あけてあることを痛感するとともに、この土地のように治療の術がないところでは、予防こそ唯一最良の手段であることを考えると、彼らの実状に適した口腔衛生指導を行うことは、大変意義があることと思われた。



村で、歯の検診をする浜地さん

かってこの地域では果物や豆からできた素朴な甘さだけであり、そのころ成長した今の大人には虫歯は少ない。しかし砂糖の入ったお菓子が手に入るようになった今の子供たちには虫歯が多いようにみえた。予防策なら専門の者でなくとも伝えることができ、また村人も実行できるはずだ。

浜地 律知 (神戸市・歯科医・6期生滞在家庭)

水牛に乗ったぞー

村の気候は朝は春、昼は夏、夕方は秋、夜は冬のように、日本の一年をタイの山の村では一日で過ごしてしまったようだった。一番心に残ったことは、ウィラットさんに水牛に乗せてもらったこと。村の子供とは話してはできなかったけど、木でできた道具で遊ばせてもらった。



水牛に乗って喜ぶ山端君(前)と黒田君

山端 和幸 (加古川市・志方小学校5年)

筑豊とタイの山村を結ぶもの

この旅を通じて援助というものについていろいろ考えた。単に日本から物、金を送ればプラスになるというものではない。援助が村の自立を混乱させることもあり、自立の障害にもなりうる。それだけ多くの違いが、日本とタイの山村との間にある気がする。物・金は即時的な効果がある。しかし、その効果が限られて、村々の自立につながるには双方が「分り合う」という意欲や前提がなければならない。さらに、その意欲や姿勢に裏付けられた具体的な努力がなければ、生きた交流はうまくいかないと思う。私の住む筑豊も「石炭」以後は、ある意味で援助を受けられる地域となってしまっているが、今回訪ねた山の村と筑豊をそのまま比較することは無理があるにしても、筑豊の自立、再生を考える場合の視点として共通するものがあるように思う。

正平 辰男 (福岡県庄内町・筑豊教育事務所主事)

魚のいない村

村では川や池を渡ってまわったが、殆ど魚をみることもなかった。ムンキーで娘さんか喉に竹籠をつけ、その上にタモ網をのせて歩いたのて魚をとりに行くのかと尋ねたところ「川にアヒルの子をとりに行くのです」との答えにびっくりした。川を観察すると小石や岩が見えたらず、川底は粘土と細かい砂だらけであり、これでは魚の餌の基となる藻類が繁殖しない。そうすればそれを食べる水生昆虫もおらず、まして魚は棲めないと思ひ、川からの食料補給は期待できないと感じた。村の中では2ヶ所、養魚池を訪れたが、ただ魚を池にいられているだけの状態。前述のとおり、自然環境の中に魚の生活を知る機会もなかったことに起因すると思われるが、知識が少なく、またどうしても増やすのだと始まるばかりだった。養魚の技術的なことは村人自身が4~5年実際に魚を飼って見て、魚という生物を知り、様々な問題が起こった上で指導するのが最善と思われ、今回は基本的な2、3のこの助言にとどめておいた。

矢田 敏児 (堺市・淡水魚試験場勤務 1, 3, 6期研修指導者)



### 総主事メモ

上野寛さんは筑豊の小さな町の百姓です。もう四年前からわれわれは研修旅行で上野さんの所を訪ねています。この間お訪ねした時5人の研修生は、上野さんから大変貴重な話を聞かせていただきました。彼は次のように言われました。「自分はこの地に留まって少しづつこの村が民主的になるようにと願ってきた。もう何年も何年も区長として地域のために働いてきた。しかしこの三十年振り返ってみるとそんなに大きな変化が起きている訳ではない。自分か願っているところまでにはこの先何年も何十年もかかるだろう。でもあきらめてはいないし、また一人だけでやろうとも思っていない。自分の次の世代が引き継いでくれることも信じている。百姓がお金のためにだけ農業をやるのではなく、詩を書き、哲学をもち、そして更に宗教を持つ時、真に百姓としての生き方が出来る」と信じている。」

一年の研修を終え、まもなく自分の村にかえっていくアジアの百姓や漁師の青年達は上野さんの言葉に深くうなづいていました。アジアの村で今起きていることは、色々と困難が伴っています。土地の不正な所有、収穫物の不正な分配、その他一部の有力者に

よる利権の集中等々。その苦しみの中にある人々の地域を変化させようとする願いは、非常に大きいものがあります。それだけに研修生の上野さんに聴き取る姿は真剣そのものでありました。

今上野さんは、町の教育委員長として学校教育、社会教育全般のかじとりという大切な役目を担っておられます。毎年研修旅行で迎えて下さるこの町の人々の輪は大きく拡がり、主に校長先生やそのO、B更には教育関係の多くの人々が、PHD運動の理解者になってくださっています。

われわれがこの町に筑豊のことを学びに行くようになって二年目にこれらの人々が一つの会を組織されました。【虹の会】と名付けられています。アジアと筑豊に虹をかけようとの願いから命名されたといいました。

一つの思いが心からそれを願う人々によって祈られる時に必ず少しづつ何かを生み出し実現していくことを私は上野さんとの出会いによって体験させられています。

すべてのものごとは必ずしも中央で運ばれていくのではなく、むしろ地方それも中央からはるか遠くに位置する辺境にこそ中央を変革する原動力があるのだと、上野さんから教えられています。

研修生の深いうなづきの中には上野さんが借金入りのキリスト者であることに對する信頼もあつたように思います。研修生自身がイス

ラム教、仏教を大切に生きているだけに上野さんの宗教者としての言葉に信頼を置いたのかも知れません。 総主事/草地賢一

### 6期生研修生レポート

(ベディ、ファイジン)

6期生2班のハスリ・ベディさんは12月から1月にかけて兵庫県飾磨郡家島町で研修を行いました。家島漁業協同組合の中村村助組合長宅にホームステイをしながら、定置網や水産加工の実習をしました。

初めて体験する寒さに震えながらも、明るいベディさんは家島の人たちにすっかりとけ込んだようです。組合の方々にも大変お世話になりました。魚網を作る工場を見学させていただいたり、家島を訪れた具原県知事と面会の機会を得たりと、様々な体験をしました。

一方、モハメド・ファイジンさんは和歌山県那賀郡田町の前田宗吉さん宅で、養殖についてさらに深い学習をしました。養殖では専門用語が次々と出てくるため、言葉の面で苦勞しながらも頑張っています。正月休みにはホームステイの松山義雄さんと共にスキーに挑戦し、ウィンタースポーツを楽しみました。

西日本研修旅行後、2月は1班の3名と共に協同組合の学習をした2人は、3月からいよいよ本格的に海に出るの研修を7月まで続けます。これからが2人の正念場といえるでしょう。

8月下旬	インドネシア・スマトラ	//	20万円
12~90.1	タイ北部・東北部	//	18万円

3月25日に民際フォーラム  
PHD協会など関西地区のNGOが応援して毎年開催されている「民際フォーラム'88」が3月25日、大阪上本町にある大塚国際交流

センターで開催されます。今年のテーマは“アジアがとびだす”で、アジアに関わる色々なことを体験しようというものです。内容は、基調講演のほか、料理教室(ベトナム料理)、民族舞踊教室(インドネシア、バリ島のケチャ)、アジアの映画などの開催が予定されています。PHDも参画します。是非ご参加を。

各地で交流の輪広がる

研修生の東日本研修旅行は、各地の人々と交流を育てて来ましたが、東京YMCAで開催されたアジア・ネットワークでは、早速その成果が出てきました。会の当日は、非常に寒く、南国育ちの研修生がふるえているのを見た、東京YMCAの城所尚代さんが立川YMCAで開かれる「バザー用の衣類を研修生に贈ることを提案、それを受けた立川YMCAが研修生用にプレゼントしたものを。



### 編/集/後/記

「なんであなたが東南アジアのことせなアカンの、日本の困ってる人のための活動が先じゃない？」PHDに首を突っ込みだした頃、両親にいつも言われた。私は、社会福祉の仕事に就くことが夢で、PHDを知ったのはホントにハズミだったから、「さうよねー、何でアジアなの？私、アフリカ

やらテンアメリカも好きだけどなあ」なんていつも大きな？を抱えていた。でも研修生とご飯を食べに行ったり、バザーの手伝いをしたり、PHDに関わる沢山の人が出会う中で、私の？はいつの間にか溶けてなくなってしまった。農家のおっちゃん、保健婦さん、学校の先生…、皆、それぞれ得意の分野でもってPHDで活躍している。それと同じようにNGOの中には、難民問題に取り組む団体さん、アフリカに井戸を掘るグループもある。

それぞれのカテゴリーでみんなが頑張っていて、それは全部関連していて大きな一つの輪になってるのさ。そして輪に、国内、国外の区別は無いのだから。………(P.L)

レター(30号)編集メンバー  
赤松恵美子 橋原 輝美 柿原登志夫  
梶原 靖子 川那辺裕子 内藤晋代子  
浅見 広心

### 帰国研修生の現況(タイ)



☆ブリジャー・ムアンチャンさん  
ムスキーの村で教師を続けられています。今の担当は小学3年生、農業を教えています。家族は奥さんと男子の2人。「もうこれでオシマイです」とのこと。学校での仕事の後は自分の畑で農業もします。日本で学んだこ



☆ウィラット・ソセンさん  
メニャハティ村で農業に携わるウィラットさん。この時期は乾期なので畑仕事は比較的少ないようです。つい最近まではニンニクの植え付けをしていたとのこと。事故で骨折したところがまだ完治せず、力の入る



☆ブラカシ・コマさん  
タホタ村で農業にとりくむコマ君。藻泊りは隣村の奥さんの実家でしています。帰国後の彼は、農業の使用をやめさせたり、タロイモの共同出荷を試みるなど精力的です。一月月に何回かチェンマイにて勉強

もしているそうです。しかし一人でがんばることよりも、村の人たちとよく話し合い、ゆっくりとしたペースでも、みんなと共に取り組むことも大事だということを改めて助言しました。近いうちにタホタに新居を建て奥さんと娘サラちゃんに住む予定だそうです。

仕事をキツイようです。村の人々ともうまくやっている様子で訪れた時にも夜遅くまで、村の長老たちと話し込んでいました。村作りの方法として作物ごと、家畜ごとによるグループづくりをめざしています。奥さんのお腹には2番目の子供がいます。

とを村の人たちに伝えていますが、できることから、あせらず、気長にという感じです。今、彼が学校から遠くの村の娘さんを自分の家に泊らせ、学校に通わせています。むろん金はとっていません。「エライねえ」とおだてると「これがPHDです」と見事に一本取られてしまいました。農業を日本で研修したからといって、それだけが伝えることではない。その人の総合的かつ日常的な行動、言動こそ、村づくりの基本的なものがあることを再認識し、その意味で彼のやさしい笑顔がとてもたのしく見えました。

### PHD NEWS

会費・ご寄付寄託状況			
1988年	11月	256件	1,182,046円
	12月	791件	9,642,838円
1989年	1月	250件	2,402,399円
計		1097件	13,227,283円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄付を頂戴致しました。ご協力に感謝申し上げます。

#### '88PHD農業交流団報告書ができました

昨年7月、タイ北部、中央部の農民との交流を行った農業交流団の報告書ができました。農業者、農協職員など農業にかかわる職業のメンバー9名による報告です。B5版56頁、発行は神戸市農業関係労働組合協議会。ご希望の方はPHD協会まで。

#### '89フォローアップ&スタディツアー予定

今年は次のツアーを予定しています。時期、期間、費用など多分に変更の可能性がりますのでご承知おき下さい。各々実施3カ月前ごろに詳しいご案内を用意します。仮予約可。

時期	訪問地	期間	費用
89.8下旬	スリランカ	約10日間	約25万円

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。